マドゥスーダナのバーガヴァタ・プラーナ註における四姓・四住期制度超克の論理

眞鍋智裕

1．はじめに

16世紀に活躍したアドヴァイタ・ヴェーダーンタ学派（以下アドヴァイタ学派と表記）の学匠であるマドゥスーダナ・サラスヴァティー（以下マドゥスーダナと表記）の著作 *Śrīmadbhāgavatādyaślokatrayasya ṭīkā* は，聖典 *Bhāgavatapurāṇa*（BhP）1.1.1-3に対してアドヴァイタ学派の立場から著された註釈である[1]。本稿では便宜上，このマドゥスーダナによる BhP に対する註釈を MSṬ と呼ぶことにする。マドゥスーダナは BhP 1.1.2に対する MSṬ において，BhP の目的（artha）は他の諸の教示書（śāstra）には説かれていないため，BhP を開始する（ārambha）必要性があることを明らかにする[2]。その際に MSṬ では，諸の教示書を１）規範の知（dharmajñāna）を目的とするもの，２）真実の知（tattvajñāna）を目的とするもの，３）念想（崇拝，upāsana, upāsanā）を目的とするもののいずれかに分類し，BhP はそれらのいずれをも目的とするものではないことを論じる[3]。以上の三分類のうち，１）規範の知を目的とする教示書は，ヴェーダ聖典に対する考究（mīmāṃsā）における行為篇（karmakāṇḍa）に属するものに，２）真実の知を目的とする教示書は知識篇（jñānakāṇḍa）に

1　マドゥスーダナの BhP に対する註釈は，従来 *Paramahaṃsapriyā*（PP）と呼ばれてきた。しかし，Bhuvaneshwari[2018] において，マドゥスーダナの BhP に対する註釈は *Śrīmadbhāgavatādyaślokatrayasya ṭīkā* と呼ばれており，PP は元来12世紀のベンガルのヴィシュヌ教徒ヴォーパデーヴァ（Vopadeva）による BhP 註のことであるが，それが誤ってマドゥスーダナの BhP 註の名前として伝わって来た，と主張されている。筆者は Bhuvaneshwari[2018] の，マドゥスーダナの BhP 註の名前は *Śrīmadbhāgavatādyaślokatrasya ṭīkā* であるという説に従い，従来の PP という呼称を訂正する。またこの MSṬ に関して，Bhuvaneshwari 博士による英訳が進行中である。また，MSṬ に対する先行研究には Raghavan[1978], Venkatkrishna[2015], 眞鍋 [2014], [2015], [2017b], [2018a], [2018c], Manabe[2017a], [2018b] がある。

2　See Venkatkrishna [2015] p. 201f.

3　眞鍋 [2017b] 参照。

属するものに，3）念想を目的とする教示書は念想篇（upāsanakāṇḍa, 神格篇 devatākāṇḍa）に対応している[4]。

マドゥスーダナは，BhPの目的は1）規範の知を目的とする教示書によって説かれていないことを論じる際に，BhPにおいて説かれているバーガヴァタの規範（bhāgavatadharma）は四姓（varṇa）・四住期（āśrama）に依存するものではないため，BhPの目的は規範の知を目的とする教示書によって説かれていないと論じている。四姓とは，ブラーフマナ（バラモン，brāhmaṇa）・クシャトリヤ（kṣatriya）・ヴァイシヤ（vaiśya）・シュードラ（śūdra）という四階級のことであり，四住期とは，特に四姓のうち上位三階級の者にとって理想とされる梵行期（brahmacārin）・家長期（gṛhastha）・林住期（vānaprastha）・遊行期（saṃnyāsin）という四つの人生のステージのことである。この論述は，マドゥスーダナがヴェーダ聖典に基づいてその教義を体系化している，保守的なアドヴァイタ学派の学匠であることを考慮すると，伝統的な四姓・四住期制度を超克していると見られる点で革新的なもののように思える。マドゥスーダナがMSṬを著すにあたって影響を受けたと考えられるシュリーダラ・スヴァーミン（Śrīdhara Svāmin, ca. 1350–1450）によるBhPに対する註釈 *Bhāvārthadīpikā*（BhAD）にも直接的にこのような論述は見られない[5]。そこ

4　この三分類は，シュリーダラ・スヴァーミンのBhADを踏まえていると考えられる。眞鍋 [2017b] 参照。

5　BhADの対応箇所は以下の通り。BhAD 34,14f.: **atra śrīmati sundare bhāgavate paramo dharmo nirūpyate. paramatve hetuḥ - prakarṣeṇa ujjhitaṃ kaitavaṃ** phalābhisaṃdhilakṣaṇaṃ kapaṭaṃ yasmin saḥ. praśabdena mokṣābhisaṃdhir api nirastaḥ. kevalam īśvarārādhanalaksaṇo **dharmo** nirūpyate（この聖なる，即ち清らかな『バーガヴァタ』において，最高の規範が確定される。［規範が］最高であることに対する根拠は［以下のようである］。欺瞞，即ち果報を狙うことを特徴とする詐欺がそこにおいて完全に捨てられた。「全く」（pra）という語によって，解脱を狙うことも否定される。ただ，主宰神への崇拝を特徴とする規範が確定される）。

また，シャンカラ（Śaṅkara, ca. -756-772-）も叙事詩（*Itihāsa*）やプラーナ（*Purāṇa*）によるシュードラの解脱の可能性を認めていたり，四住期に属していないものにも解脱の可能性を認めていたりするため，マドゥスーダナの立場はシャンカラの立場に近いものと言える。したがって，アドヴァイタ学派自体がミーマーンサー学派等の伝統学派に比べて保守的ではないと言うことができよう。しかし，シャンカラの立場は基本的には四姓・四住期制度を前提としているため，マドゥスーダナのように，そもそも四姓・四住期制度は必要ないというような四姓・四住期制度を超克する考え方を持ってはいない。島 [1980] p.41, 島 [1986]，澤井 [2016] p. 231参照。

で本稿では，MSṬ on BhP 1.1.2における当該箇所を検討し，マドゥスーダナが，BhPにおけるバーガヴァタの規範と伝統的な四姓・四住期に応じた規範（varṇāśramadharma）をどのような関係のものとして考えていたのか，バーガヴァタの規範による四姓・四住期制度超克の論理を明らかにしたい。

2．BhPにおけるバーガヴァタの規範は四姓・四住期に応じた規範に依存しない

MSṬ on BhP 1.1.2において，BhP 1.1.2[6]の "dharmaḥ projjhitakaitavo 'tra paramo nirmatsarāṇāṃ satāṃ … śrīmadbhāgavate …"（この聖なるバーガヴァタにおいて，欺瞞を完全に捨てた最高の規範とは，嫉妬のない賢者達にとって……）に対する註釈箇所が，行為篇を論じた箇所となっている。さらにこの箇所のうち，"dharmaḥ projjhitakaitavaḥ paramaḥ"（欺瞞を完全に捨てた最高の規範）に対する註釈箇所においてマドゥスーダナは，BhPの目的は規範の知を目的とする他の教示書によって説かれていないことを論じている。マドゥスーダナは，*Viṣṇupurāṇa*（ViP）等によってBhPの目的は果たされていないことを論じる際に，以下のように述べる。

> MSṬ 15,14-17: praśabdena viṣṇupurāṇādibhir agatārthatvaṃ sūcayati. tatra hi sarvātmanā na kaitavaṃ projjhitam.
>
> varṇāśramācāravatā puruṣeṇa paraḥ pumān /
>
> viṣṇur ārādhyate panthā[7] nānyas tattoṣakāraṇam // ViP 3.8.9 //
>
> ityādinā bhāgavatadharmāṇām api varṇāśramadharmasāpekṣatvakathanāt.

「全く」（pra）という語によって，『ヴィシュヌ・プラーナ』等によって

6 BhP 1.1.2: dharmaḥ projjhitakaitavo 'tra paramo nirmatsarāṇāṃ satāṃ vedyaṃ vāstavam atra vastu śivadaṃ tāpatrayonmūlanam / śrīmadbhāgavate mahāmunikṛte kiṃ vā parair īśvaraḥ sadyo hṛdy avaruddhyate 'tra kṛtibhiḥ śuśrūṣubhis tatkṣaṇāt //（偉大な聖仙によって作られた，この聖なるバーガヴァタにおいて，この世において欺瞞を完全に捨てた最高の規範とは，嫉妬のない賢者達にとって知られる，実際に存在する実在物であり，幸福を与える，三つの苦しみを根絶するものであると［説かれる］。或いは，どうして他の者達によって，主宰神は心に即座に留めおかれるだろうか。これ（BhP）を聞こうと願う巧妙な者達によって，［主宰神は心に］その瞬間に［留めおかれる］）。

7 panthā] conj. ViP: panthāḥ $MSṬ_{\$}$, $MSṬ_{2S}$.

目的が果たされていないことを示唆している。というのは，そこ[『ヴィシュヌ・プラーナ』等] において，全面的には（sarvātmanā）欺瞞（kaitava）は捨てられていないから。[というのは]

> [四] 姓と [四] 住期に相応しい良俗を持つ人によって，ヴィシュヌ [神] は最高の存在（paraḥ pumān）として崇敬される。彼を満足させる原因である他の道は存在しない。

等によって，[『ヴィシュヌ・プラーナ』等において] 諸のバーガヴァタの規範も，[四] 姓や [四] 住期に応じた規範に依存することが語られているから。

ここでは，BhP 1.1.2において BhP における最高の規範であるバーガヴァタの規範は「欺瞞が完全に捨てられた」(projjhitakaitava) ものであると説かれていることをもとに，ViP においてバーガヴァタの規範が説かれていることは認めながらも，なおも ViP に説かれているバーガヴァタの規範には全面的には欺瞞が捨てられていないとして，ViP によっては BhP の目的が果たされていないと言うのである。そして，その ViP においてまだ全面的に捨てられていない欺瞞とは，バーガヴァタの規範であっても，四姓・四住期に応じた規範に依存していることである。つまり，四姓・四住期に応じた規範に依存していることが欺瞞と呼ばれているのである。

それに対して BhP においては，バーガヴァタの規範は四姓・四住期制度に応じた規範に依存していないことが述べられる。

MSṬ 15,17–21: atra tu –

> tyaktvā svadharmaṃ caraṇāmbujaṃ hareḥ bhajann apakvo 'tha patet tato yadi /
> yatra kva vābhadram abhūd amuṣya kiṃ ko vārtha āpto 'bhajatāṃ svadharmataḥ // BhP 1.5.17 //

ityādiprabandhena bhāgavatadharmāṇām anyanirapekṣatvapratipādanāt, prakarṣeṇa **kaitavam ujjhitam** iti. etac ca –

> kecit kevalayā bhaktyā vāsudevaparāyaṇāḥ /
> aghaṃ dhunvanti kārtsnyena nīhāram iva bhāskaraḥ // BhP 6.1.15 //

ityādau sphuṭībhaviṣyati.

しかし，ここ（『バーガヴァタ・プラーナ』）において，

> 自身の規範を棄ててハリ［神］（クリシュナ神）の蓮華のような足を信愛する者が，もしも［業が］熟しておらず，また失墜したとしても，いったい如何なるところで，このような人に有害なことが生じるだろうか。或いは，非信愛者達に，自身の規範にもとづいて如何なる利益が得られたであろうか。

等の記述により，諸のバーガヴァタの規範が他のものに依存しないことが説かれているから，完全に（prakarṣeṇa）欺瞞が捨てられた，ということである。そしてこのことは，

> 信愛だけによってヴァースデーヴァ［神］（クリシュナ神）を崇敬する或る者達は，太陽が完全に霧を［払う］ように，［完全に］罪を払う。

等において明らかとなるであろう。

ここでマドゥスーダナは，BhP 1.5.17を引用し，自身の規範，つまり四姓・四住期に応じた個々人の規範を捨ててクリシュナ神を信愛する者（bhajan）が失墜したとしても如何なる有害なことも生じないが，自身の規範に基づいて行動する非信愛者には如何なる利益も得られないことを示している。そしてそのことによって，BhPにおけるバーガヴァタの規範が，四姓・四住期に応じた自身の規範という他のものに依存していないと述べている。さらにBhP 6.1.15を引用し，クリシュナ神を「信愛だけによって」（kevalayā bhaktyā）崇敬する者は完全に罪を払う，ということを示すことで，罪の除去に四姓・四住期に応じた規範が必要ないことを明らかにしている。

以上のようにMSṬにおいて，BhPに説かれているバーガヴァタの規範は四姓・四住期に応じた規範に依存することはないため，四姓・四住期に依存することという欺瞞を完全に捨てていることが明らかにされている。

3．バーガヴァタの規範とは手段としての信愛のことである

ところで，上掲のMSṬにおいて，引用されたBhPには「バーガヴァタの規範」（bhāgavatadharma）という語は見られない。それにも拘らず，マドゥスーダナは引用したBhPにバーガヴァタの規範を読み込んでいる。引用したBhP

に見られるのは「信愛者」(bhajan) と「信愛」(bhakti) である。したがって，マドゥスーダナはバーガヴァタの規範と信愛とに密接な関係を持たせていることが想定される。

以下では，マドゥスーダナがバーガヴァタの規範と信愛とをどのような関係を持つものと捉えていたのかを明かにするため，先ずマドゥスーダナはバーガヴァタの規範をどのようなものと考えていたのかを検討したい。上掲の MSṬ に先立って，マドゥスーダナは以下のようなことを述べている。

MSṬ 14,23–15,6: atra pratipādyānāṃ śravaṇakīrtanādilakṣaṇānāṃ dharmāṇāṃ bahutve 'pi, bhagavatsvarūpaprāptilakṣaṇaphalaikyāt ekatvam. tathā caikaphalako dharmarāśiḥ atra partipādyate. karmakāṇḍātmakadharmaśāstreṣu ca vibhinnaphalānāṃ dharmāṇāṃ pratipādanāt, na paunaruktyam. etad abhivyanakti - **parama** iti. sarvataḥ śreṣṭha ity arthaḥ. tathā ca vakṣyati –

sa vai puṃsāṃ paro dharmo yato bhaktir adhokṣaje /
ahaituky apratihatā yayātmā suprasīdati // BhP 1.2.6 //

iti. etena manvādidharmaśāstrair agatārthatvam uktam. tatra –

śravaṇaṃ kīrtanaṃ viṣṇoḥ smaraṇaṃ pādasevanam /
arcanaṃ vandanaṃ dāsyaṃ sakhyam ātmanivedanam // BhP 7.5.23 //

ityādibhāgavatadharmāpratipādanāt.

ここ (BhP) において，説かれるべき，聴聞と称賛等を特徴とする諸の規範が多いとしても，主の本質の獲得を特徴とする果報は一つであるので，［諸の規範の果報は］一つである。［よって，BhP において規範は単数形で表されている。］即ち，一つのものを果報とする規範の集りが，ここ (BhP) において説かれている。そして，行為篇 (karmakāṇḍa) を本性とする諸の法典においては，別々のものを果報とする諸規範が教えられているので，［バーガヴァタの規範はそれらの］再言及ではない。このことを明らかにする。最高の，と。いずれのものより勝れている，という意味である。そして同様に［ヴィヤーサ仙は］述べるだろう。

アドークシャジャ（クリシュナ神）に対する，根拠のない[8]，障礙の

8 この「根拠のない」(ahaitukī) という語の意味に関して，BhAD は以下のように註釈を付している。BhAD 40,1: **ahaitukī** hetuḥ phalānusaṃdhānaṃ tadrahitā（根拠の

ない信愛がそれから生じ，自身がそれによって非常に清澄になるもの，実にそれが人々にとっての最高の規範である。

と。このことによって，マヌ等という諸法典によって，［BhP の］目的が果たされていないことが述べられた。そこ（マヌ等という諸法典）において，

ヴィシュヌ［神］に関して，聞くこと（śravaṇa），讃えること（kīrtana），想起すること（smaraṇa），もてなすこと（pādasevana），供養すること（arcana），崇拝すること（vandana），隷属すること（dāsya），親密であること（sakhya），身体を捧げること（ātmanivedana）。

等というバーガヴァタの規範が教えられていないから。

ここでは先ず，BhP において説かれるべきバーガヴァタの規範は，その数は多いけれども，その果報は主の本質の獲得（bhagavatsvarūpaprāpti）という一つだけであることが述べられている。そして，そのようなバーガヴァタの諸規範は，行為篇に属する諸の法典（dharmaśāstra）に説かれている諸規範に再言及したもの（paunaruktya）ではなく，別のものであるというのである。その理由は，諸法典に説かれている諸規範の果報はそれぞれの規範に応じて別々であるから，つまりバーガヴァタの規範とその果報が異なっているからである。

さらに注目すべきは，マドゥスーダナは BhP 1.2.6を引用して，バーガヴァタの規範が最高のものであることを示そうとしているが，その BhP 1.2.6において最高の規範とはクリシュナ神に対する信愛を生み出すものと説かれていることである。マドゥスーダナは BhP におけるバーガヴァタの規範を最高の規範と捉えているため，バーガヴァタの規範はクリシュナ神に対する信愛を生じさせるもの，と考えているということとなる。また，マドゥスーダナはこのバーガヴァタの規範が「マヌ等の諸法典」に説かれておらず，そのためマヌ等の諸法典が BhP の目的を果たしていないことを主張しており，そのマヌ等の諸法典に説かれていないとされるバーガヴァタの規範の例として BhP 7.5.23を引用している。実はこの BhP 7.5.23は，マドゥスーダナにとってのバーガヴァタの規範と信愛との関係を考察するうえで重要な詩節である。

マドゥスーダナは彼の信愛論を開陳した著作 *Bhaktirasāyana* (BhR) において，

ないものとは，原因と，結果を追求すること，それらを欠いているものである)。

信愛を「結果」(phala) と「手段」(sādhana) の二種に分けている[9]。そして，BhP 7.5.23に述べられている聴聞 (śravaṇa)・称賛 (kīrtana)・想起 (smaraṇa)・もてなし (pādasevana)・供養 (arcana)・崇拝 (vandana)・隷属 (dāsya)・親密さ (sakhya)・身体を捧げること (ātmanivedana) という九つの実践は，それら結果としての信愛と手段としての信愛のうち，手段としての信愛とされている[10]。先述の通り MSṬ においてはこれら九つの実践はバーガヴァタの規範と言われているため，バーガヴァタの規範とは手段としての信愛のことを指していると考えられる。このことを例証する BhR の記述を以下で検討したい[11]。

BhR 21,2-6: bhajanam antaḥkaraṇasya bhagavadākāratārūpaṃ bhaktir iti

---

9 信愛を手段と結果の二種に分ける考え方は，BhP 11.3.31に対するシュリーダラ・スヴァーミンの BhAD に既に見られる。Gupta[2006] p. 121, Nelson[2004] pp. 351-352参照。また，チャイタニヤ派においては，信愛は sādhanabhakti, bhāvabhakti, premabhakti の三種に分類されるが，sādhanabhakti はマドゥスーダナの sādhanabhakti に相当する。Gupta[2006] p. 122参照。マドゥスーダナは，BhAD と MSṬ を比較する限り，BhAD を参照しつつ MSṬ を著したと考えられ，BhAD における信愛論に影響を受けていると考えられる。また，マドゥスーダナはチャイタニヤ派を知っていたと考えられるが，三種の bhakti を説いたルーパ・ゴースヴァーミン (Rūpa Gosvāmin, ca. 1470-1560) やその甥ジーヴァ・ゴースヴァーミン (Jīva gosvāmin, ca. 1555-1600) を直接知っていたかどうか，そのことを示す証拠はない。Gupta[2006] ではマドゥスーダナが彼等を知っていたかどうか不確かであるとし，またシュリーダラよりもマドゥスーダナの説はベンガルのヴィシュヌ教徒であるヴォーパデーヴァ (Vopadeva, ca. 12th) に近いとする。Gupta[2006] p. 120参照。Nelson[2004] では，シュリーダラからマドゥスーダナへの影響と共に，ルーパからマドゥスーダナへの影響の可能性を示唆し，またヴィッタレーシャ (Viṭṭhaleśa, ca. 16th?) を始めとするヴァッラバ派との関係性も示唆している。Nelson[2004] pp. 388-399参照。

10 BhR 115,9-13: tac ca bhajanaṃ vivṛtam – śravanaṃ kīrtanaṃ viṣṇoḥ smaraṇaṃ pādasevanam / arcanaṃ vandanaṃ dāsyaṃ sakhyam ātmanivedanam // iti puṃsārpitā viṣṇau bhaktiś cen navalakṣaṇā / kriyate bhagavaty addhā tan manye 'dhītam uttamam //BhP 7.5.23-24// (そして，その信愛 (bhajana) が解説された。―ヴィシュヌ［神］に関して，聞くこと，讃えること，想起すること，もてなすこと，供養すること，崇拝すること，隷属すること，親密であること，身体を捧げること，という，ある人によってヴィシュヌ［神］に対して与えられた，九つの定義的特質を持つ信愛が，主に対して明白に為されるとすれば，［私は］それ（信愛）が最上の学識であると考える)。また，日野 [1985] p. 27, 日野 [1988] p. 31参照。

11 BhR の翻訳に際して，Nelson[1986] の Chapter VII を参照した。

bhāvavyutpattyā bhaktiśabdena phalam abhidhīyate ... bhajyate sevyate bhagavadākāram antaḥkaraṇaṃ kriyate 'nayeti karaṇavyutpattyā bhaktiśabdena śravaṇakīrtanādi sādhanam abhidhīyate.

信愛とは，内官が主を形相とすることをあり方とする信愛すること（bhajana）である，という行為による語源解釈（bhāvavyutpatti）によって，「信愛」という語で結果が表詮されている。……それによって信愛される，奉仕される，主の形相を持った内官が作られる，という行為手段による語源解釈（karaṇavyutpatti）によって，「信愛」という語で聴聞・称賛等という手段が表詮されている。

ここでは，行為による語源解釈と行為手段による語源解釈によって，信愛が二種類であることが説明されている。そのうち，行為手段による語源解釈によって，「『信愛』という語で聴聞・称賛等という手段が表詮されている」というように，手段としての信愛が聴聞・称賛等から成ることが述べられている。聴聞・称賛という組み合わせから，「等」には上述の九つのうち，残りの七つが含まれていると考えられる。

そしてこれより以下で，以下のような記述が見られる。

BhR 21,11-22,9: etac ca spaṣṭīkṛtaṃ prabuddhena –

smarantaḥ smārayantaś ca mitho 'ghaughaharaṃ harim /

bhaktyā saṃjātayā bhaktyā bibhraty utpulakāṃ tanum // 11.3.31 //

iti. atra karaṇavyutpattyā prathamabhaktiśabdo bhāgavatadharmeṣu prayuktaḥ, dvitīyas tu bhāvavyutpattyā phale.

iti bhāgavatān dharmāñ śikṣan bhaktyā tadutthayā /

nārāyaṇaparo māyām añjas tarati dustarām // 11.3.33 //

ity upasaṃhāre prathamabhaktipadasthāne bhāgavatadharmaśabdaprayogāt.

また以上のこと（信愛が結果と手段との二種であること）は，プラブッダ［仙］によって明らかにされた。

多くの罪を滅ぼすハリ［神］を，相互に想起し，また想起させる者達は，信愛によって生じた信愛によって，逆毛立った身体を持つ（喜びを感じる）。

と。ここでは，行為手段による語源解釈によって，第一の信愛という語が主の諸規範に対して使用された。一方，第二［の信愛という語］は，行為による語源解釈（bhāvavyutpatti）によって結果に対して［使用された］。

以上のように（iti），バーガヴァタの諸規範を学んでいる，ナーラーヤナ［神］を主眼とする者は，それ（バーガヴァタの諸規範）から生じた信愛によって，超え難いマーヤーを素早く超える。

という［プラブッダ仙の言葉の］結句において，第一の信愛という語［があるだろう］場所に，バーガヴァタの規範という語が使用されているから。

ここでは，BhP 11.3.31と BhP 11.3.33のプラブッダ仙の言葉を提示し，その言葉を根拠として，信愛が結果と手段との二種あることが説かれている。マドゥスーダナは，BhP 11.3.31におけるプラブッダ仙の「信愛によって生じた信愛によって」(bhaktyā saṃjātayā bhaktyā) という言葉のうち,「信愛によって生じた」という第一の信愛という語はバーガヴァタの諸規範の意味で使用されていると述べている。そして,「行為手段による語源解釈によって」という表現は，この第一の信愛が手段としての信愛を意味していることを表している。

またマドゥスーダナは，BhP 11.3.33においては反対に,「バーガヴァタの規範を学んでいる」という際の「バーガヴァタの規範」という語が使用されているところに,「第一の信愛」という語が適用されるべきであると考えている。BhP 11.3.33では，そのバーガヴァタの規範から信愛が生じると述べられていることから，このバーガヴァタの規範である第一の信愛も，手段としての信愛のことである。それ故マドゥスーダナは，バーガヴァタの規範と手段としての信愛を同じものであると考えていることが理解される。

以上のように，マドゥスーダナは BhR において，BhP におけるバーガヴァタの規範を手段としての信愛であると考えている。このことは, MSṬ において，最高の規範であるバーガヴァタの規範が信愛を生じさせるものであると考えられていたことと一致し，また四姓・四住期に応じた規範に依存しないことを論じる際に，信愛や信愛者が言及されていたことの理由となる。したがって，MSṬ におけるバーガヴァタの規範も，BhR と同様に手段としての信愛のことを指していると結論付けられる。

以上のように, MSṬ におけるバーガヴァタの規範は手段としての信愛である。

このことから，バーガヴァタの規範が四姓・四住期に応じた規範に依存しないと言われているのはどうしてか，ということが理解しやすくなる。BhR において，マドゥスーダナは信愛とブラフマンの明知との違いを説明する際に，以下のように述べる。

BhR 27,6: prāṇimātrasya bhaktāv adhikāraḥ.
生類一般に，信愛に対する資格（adhikāra）がある。

また，MSṬ においても以下のような記述がある。

MSṬ 18,11f.: **vāstavam** ity atra kartṛpadānabhidhānam aviśeṣeṇaiva sarvādhikārasūcanārtham.
実際に存在するもの，というここにおいて行為主体［を表す］語が表述されていないのは，全く残りなく，一切のものに［最高の規範に対する］資格があることを示唆するためである。

これら BhR と MSṬ の記述は，両方とも，最高の規範である手段としての信愛に対する有資格者は，一切の生類であることを述べたものである。そのため，最高の規範であり，バーガヴァタの規範である手段としての信愛は，四姓や四住期に応じて定まっているのではなく，それらに依存することがないのである。

4．最高の規範である信愛に至るまでは四姓・四住期に応じた規範が為されるべきである

以上のようであるとすると，マドゥスーダナは，四姓・四住期に応じた諸規範を完全に否定し，超克しているのであろうか。この点を以下では考察したい。MSṬ において，バーガヴァタの規範が四姓・四住期に応じた規範に依存しないと述べられたことに対して，反論者との以下のような議論がなされている。

MSṬ 16,5–10: nanv evaṃ sati bhinnakarmatvāpātaḥ varṇāśramācāradharmānapekṣatvād iti.
ata āha - **nirmatsarāṇāṃ satām** iti. santaḥ śuddhāntaḥkaraṇāḥ rāgadveṣādidoṣ-

aśūnyāḥ sādhavaḥ, teṣām evāyaṃ varṇāśramadharmanirapekṣo bhāgavato dharma ity arthaḥ. tathā ca vakṣyati –

tāvat karmāṇi kurvati[12] na nirvidyeta yāvatā /

matkathāśravaṇādau vā śraddhā yāvan na jāyate // 11.20.9 //

ityādi. tathā ceha janmani janmāntare 'nuṣṭhitaiḥ sukṛtaiḥ śuddhasattvānāṃ kuto bhinnakarmatvāpātaḥ, tatsampādakarāgadveṣarāhityāt.

【反論】以上のようである時，［決められた］行為を破る者であることが帰結する。［四］姓・［四］住期［に応じた］規範に依存しないから，と。

【答】それ故に答える。嫉妬のない賢者達に，と。賢者達とは，清浄な内官を持つ，貪りや嫌悪等という過失を欠いた聖者達である。彼等にのみ，この［四］姓・［四］住期［に応じた］規範に依存しないバーガヴァタの規範がある，という意味である。即ち［ヴィヤーサ仙は］述べるだろう。

厭世しない限り，或いは私の物語を聞くこと等に対して信心が生じない限り，［人は］諸行為を行う。

等と。そしてそのような場合，この生と他の生において為された正しい行為によって清浄な純質を持つ者達が，どうして［決まった］行為を破る者となるだろうか。それ（行為を破る者であること）を齎す貪りや嫌悪が欠如しているから。

ここでの議論は以下のようなものである。反論者は，バーガヴァタの規範に基づく者には，バーガヴァタの規範が四姓・四住期に応じた諸規範に依存するものではないため，聖典や教示書において決められた行為を破る者であることが帰結する，と批判している。マドゥスーダナは，その批判に対して，BhP 1.1.2における「賢者達に」(satām) という語に対して註釈することによって，その批判が中らないことを述べる。即ち，清浄な内官を持つ，貪りや嫌悪等という過失を欠いた聖者である賢者達には，決められた行為を破る者であることを齎すような貪りや嫌悪がない。そのような彼等にのみ，この四姓・四住期に応じた規範に依存しないバーガヴァタの規範があるのである。したがって，バーガヴァタの規範に基づく者は，決められた行為を破る者とはならないのである。

このMSṬにおいて，バーガヴァタの規範に基づく賢者達は，この生と他の

12 kurvati] MSṬ2$_S$: kurvīta MSṬ$_Ś$.

生において正しい行為をなし，清浄な内官を持つ，あるいは清浄な純質を持つ者となったことが述べられている。この清浄な内官を持つ，という点に関して，BhR において関連する議論が見られる。マドゥスーダナは BhR において，人間の目的（pumartha）を行為のヨーガ（karmayoga），八支ヨーガ（aṣṭāṅgayoga），知のヨーガ（jñānayoga），信愛のヨーガ（bhaktiyoga）の四種に分類[13]してから，それらのうち先ず行為のヨーガを為すべきことを述べる。

BhR 4,8–5,7: śāstravihito varṇāśramadharmarūpaḥ karmayogo 'ntaḥkaraṇa-śuddhisādhanatvena tāvatparyantam anuṣṭheyaḥ.

tāvat karmāṇi kurvīta na nirvidyeta yāvatā /

matkathāśravaṇādau vā śraddhā yāvan na jāyate // BhP 11.20.9 //

iti bhagavadvacanāt. antaḥkaraṇaśuddhisādhanatvaṃ ca "tasya dharmeṇa pāpam apanudati tasmād dharmaṃ paramaṃ vadanti"[14], "yena kena yajñenāpi vā darvihomenānupahatamanā eva bhavati"[15] ityādiśrutisiddham.

教示書に規定された，［四］姓・［四］住期［に応じた］規範をあり方とする行為のヨーガが，内官を浄化する手段として，その限りに至るまで（内官を浄化するまで）遂行されるべきである。

厭世しない限り，或いは私の物語を聞くこと等に対して信心が生じない限り，［人は］諸行為を行う。

という主の言葉があるから。また，［行為のヨーガが］内官を浄化する手段であることは，「［彼は］彼の罪悪を規範によって除去する。それ故に，［彼等は］規範を最高のものと言う」「如何なる祭祀によってであれ，ダルヴィ献供によってであれ，正に損なわれていない思考器官を持つ者となる」等という天啓聖典によって成立している。

---

13 BhR 3,4f.: karmayogo 'ṣṭāṅgayogo jñānayogo bhaktiyoga iti catvāraḥ pumarthatvena prasiddhā yogāḥ（行為のヨーガ，八支ヨーガ，知のヨーガ，信愛のヨーガという四つのヨーガが，人間の目的として周知されている）。

14 *Mahānārāyaṇopaniṣad* (MNU) 22,1?. Cf. MNU 23,22-24,1: dharme viṣvasya jagataḥ pratiṣṭhā loke dharmiṣṭhaṃ prajā upasarpanti dharmeṇa pāpam apanuvanti dharme sarvaṃ pratiṣṭhitaṃ tasmād dharmaṃ paramaṃ vadanti.

15 出典未確定。*Brahmasiddhi* と *Pañcapādikā* にもほぼ同文が引用されているが，Acharya[2006] p.21によっても，出典は不明とのことである。

ここでの記述から，マドゥスーダナの言う行為のヨーガとは，祭祀行為等という四姓・四住期に応じた諸規範の遂行のことであることが理解できる。またその四姓・四住期に応じた諸規範は，内官の浄化の手段であり，内官の浄化が達成されるまではなされるべきものとされている。

ここで，MSṬにおいては，バーガヴァタの規範に基づく賢者達は，この生と他の生において正しい行為を為すことによって清浄な内官を持つ者となったと述べられていたが，それはこのBhRにおいて，四姓・四住期に応じた諸規範を遂行することによって内官を浄化することと対応していると考えられる。このことは，MSṬとBhRとのいずれにも同じBhP 11.20.9が議論の根拠として引用されていることからも確かめられよう。そうすると，MSṬにおける「この生と他の生における正しい行為」とは，BhRにおける「四姓・四住期に応じた諸規範の遂行」であることとなろう。

以上のことから，以下のように言うことができよう。即ち，MSṬにおいて，バーガヴァタの規範は四姓・四住期に応じた諸規範に依存しないもの，つまり四姓・四住期に応じた諸規範を超克したものであることが述べられていた。しかし，その四姓・四住期に応じた諸規範を超克したバーガヴァタの規範，即ち手段としての信愛に対する有資格者である，清浄な内官を持つ賢者となるためには，四姓・四住期に応じた諸規範の遂行が前提となっているのである。

5．結論

MSṬにおけるマドゥスーダナの四姓・四住期制度の超克の論理は以下のようなものであった。即ち，マドゥスーダナは，手段としての信愛とバーガヴァタの規範を同一視し，規範（dharma）という観点から，その手段としての信愛であるバーガヴァタの規範を，四姓・四住期に応じた諸規範に依存しないものとして，それらの上位に置くものである。またバーガヴァタの規範が四姓・四住期に応じた諸規範に依存しないのは，手段としての信愛であるバーガヴァタの規範の有資格者が，四姓・四住期に限定されない一切の生類であるからである。このようなマドゥスーダナの見解は，MSṬにおいてもBhRにおいてもBhPが議論の根拠として提示されていたことから，BhPの見解に基づいて[16]形

16 BhRに関しては日野[1985] p. 27, 日野[1988] p. 311, Nelson[2004] p. 362f. 参照。BhPにおいては，バーガヴァタの規範として挙げられるのはヨーガにおける制戒（yama）

成されたものであると考えられる。しかし，そのバーガヴァタの規範の有資格者である一切の生類は清浄な内官を持つ者であり，そのような清浄な内官を持つ者になるためには，その限りにおいて，却って四姓・四住期に応じた諸規範の遂行が前提とされている。

以上のように，バーガヴァタの規範に関するマドゥスーダナの見解は，バーガヴァタの規範そのものは四姓・四住期制度を超克していることを認めているという点において，保守的なアドヴァイタ学派の中でも革新的なものと言える。しかし，バーガヴァタの規範に対する有資格者になるまでは，やはり四姓・四住期制度を前提としているという点では，アドヴァイタ学派の学匠であるマドゥスーダナの保守的な部分が未だ残存していると言えよう[17]。

（本稿は，科研費17J00156の助成を受けたものである）

参考文献一覧

一次文献

BhAD　*Bhāvārthadīpikā* (Śrīdhara Svāmin): *Śrīmadbhāgavata-Mahāpurāṇam:*

と勧戒（niyama），ヴェーダーンタ学派における六つの達成手段（ṣaṭsādhana），マドゥスーダナが手段としての信愛とする九つの実践行為等の30の実践項目であり，或はハリ神の称名が単一のバーガヴァタの規範として挙げられるという。Tagare[1976] p. lxv 参照。また，マドゥスーダナにとっても，結果としての信愛を生じさせるのは手段としての信愛のみではなく，その他の善行（sukṛta）からも信愛が生じる，とも述べる。MSṬ 19,22-24: tasya paramadurlabhatvam āha - **phalam iti** sarvasukṛta-karmaphalabhūtam. tathā ca vakṣyati – dānavratatapohomajapasvādhyāyasaṃyamaiḥ / śreyobhir vividhaiś cānyaiḥ kṛṣṇe bhaktir hi sādhyate // BhP 10.47.24 // iti（それが最高に得難いことを述べる。結果を，とは，全ての善く行われた行為の結果たるものである。即ち，［ヴィヤーサ仙は］述べるだろう。―実に，布施，誓戒，苦行，ホーマ，低誦，ヴェーダ学習，自己制御，また他の多様な善行によって，クリシュナ［神］に対する信愛は達成される―と）。また，BhR 28,1f.: yajñadānādisarvasukṛtasādhyatvaṃ tu samānam bhaktibrahmavidyayoḥ svargavividiṣayor iva（一方，信愛とブラフマンの明知とは，天界と知ろうとする欲求とのように，祭祀や布施等という全ての善行によって達成されるべきものであることは同じである）。

17　シャンカラ以来，アドヴァイタ学派において四姓・四住期に依存する諸規範，行為のヨーガに該当する祭祀行為は，内官の浄化に役立つものとしてその存在意義を得てきた。島 [1986] 参照。マドゥスーダナの立場もこのアドヴァイタ学派の伝統に立脚するものである。したがって，筆者がここで「保守的」という場合，ブラーフマナとしての保守性と，アドヴァイタ学派の学匠としての保守性の両方の意味で述べている。

"Śrīdharī"-Ṭīkopetam. Ed. Ramatej Pandhey. (Brajajīvan Prādhyabhāratī Granthamālā 28) Dillī: Chaukhambha Sanskrit Pratishthan 2011.

BhP *Bhāgavatapurāṇa* (Vyāsa): See BhAD.

BhR *Bhaktirasāyana* (Madhusūdana Sarasvatī): BhR_D, BhR_P, BhR_J. (底本は BhR_J)

BhR_P *Śrībhagavadbhaktirasāyanam Śrīmanmadhusūdanasarasvatīyativaraviracitam.* Ed. Prema Parapa Gosvami Damodar Shastri. Kāśī: Acyutagranthamālā 1927.

BhR_D *Śrīmadbhaktirasāyanam Ullāsatrayollāsitam Ṭīkāṭippaṇyādibhir upaśobhitam.* Ed. Damodara Namputirippat. Kāśī: Śrīsāṅgavedavidyālaya1950.

BhR_J *Śrīmadhusūdanasarasvatīpraṇītaṃ Śrīmadbhaktirasāyanam.* Ed. & Com. Janārdhanaśāstrī pāṇḍeya. Vārāṇasī: Motilal Banarsidas 2018 samvat.

MSṬ *Paramahaṃsapriyā* (Madhusūdana Sarasvatī): See $MSṬ_S$, $MSṬ_{2S}$, $MSṬ_{3S}$. (底本は $MSṬ_S$)

$MSṬ_S$ *Śrīmadbhāgavatādyaślokatrayasya ṭīkā Śrīmanmadhusūdanasrasvatīkṛtā.* Ed. Śrīyuktakṛṣṇagopālabhakta. Kalikātā: Śrīyuktarāmaramaṇabhakta 1815 Śakābda.

$MSṬ_{2S}$ http://sans.lalitaalaalitah.com/2014/07/paramahaMsapriyA-25.html. (PDF version: Downloaded from https://ia902504.us.archive.org/3/items/paramahaMsapriyA-2-shlokaH/paramahaMsapriyA-2-shlokaH.pdf on July 2nd 2017). Only on *Bhāgavatapurāṇa* 1.1.2.

$MSṬ_{3S}$ http://sans.lalitaalaalitah.com/2014/07/paramahaMsapriyA-26.html. (PDF version: Downloaded from https://ia802509.us.archive.org/31/items/paramahaMsapriyA-3-shlokaH/paramahaMsapriyA-3-shlokaH.pdf on July 2nd 2017). Only on *Bhāgavatapurāṇa* 1.1.3.

ViP *Viṣṇupurāṇa* (Vyāsa): *Viṣṇumahāpurāṇam of Maharṣi Vedavyāsa with Sanskrit Commentary "Ātmaprakāśa" of Śrīdharācārya (1 to 3 aṃśas) Vol. 1.* Ed. Thaneshachandra Upreti. (Parimal Sanskrit Series No. 21) Delhi: Parimal Publications 2011.

二次文献

Acharya, Diwakar

[2006] *Vācaspatimiśra's Tattvasamīkṣā: The Earliest Commentariy on Maṇḍanamiśra's Brahmasiddhi*. Ed. Diwakar Acharya. (Nepal Research Centre Publications No. 25) Kathmandu: Franz Steiner Verlag Stuttgart.

Bhuvaneshwari, S.

[2018] "The Authorship of the Paramahaṃsapriyā Commentary on the *Bhāgavata Purāṇa*", *The Journal of Hindu Studies* 11(2), Oxford University.

Gupta, Sanjukta

[2006] *Advaita Vedānta and Vaiṣṇavism: The Philosophy of Madhusūdana Sarasvatī*. London and New York: Routledge.

Hino, Shoun（日野紹運）

[1985]「ヒンドゥーの宗教世界—不二一元論派学匠マドゥスーダナ・サラスヴァティーのバクティ観をめぐって」*Saṃbhāṣā* 6, 名古屋大学印度学仏教学研究会。

[1988]「マドゥスーダナ・サラスヴァティーにおけるブラフマンの意義について」『成田山仏教研究所紀要』11, 仏教思想史研究 II, 成田山新勝寺。

Manabe, Tomohiro（眞鍋智裕）

[2014]「マドゥスーダナ・サラスヴァティーの vyūha 説摂取の方法—シャンカラの所説との対比から」『久遠—研究論文集』5, 早稲田大学仏教青年会。

[2015]「*Paramahaṃsapriyā* 研究ノート」『論叢アジアの文化と思想』24, アジアの文化と思想の会。

[2017a] "Madhusūdana Sarasvatī's Interpretation of Viṣṇu," *Journal of Indian and Buddhist Studies (Indogaku Bukkyōgaku Kenkyū)* 65-3, Japanese Association of Indian and Buddhist Studies.

[2017b]「*Paramahaṃsapriyā* における諸典籍の分類について—on *Bhāgavatapurāṇa* 1.1.2」『南アジア古典学』12, 九州大学大学院人文科学府・文学部インド哲学史研究室。

[2018a] "On the Significance of the *Bhāgavatapurāṇa* in Madhusūdana Sarasvatī's Advaita Doctrine," *Journal of Indian and Buddhist Studies (Indogaku Bukkyōgaku Kenkyū)* 66-3, Japanese Association of Indian and

Buddhist Studies.

[2018b]「アドヴァイタ的ヴィユーハ説の形成過程について」『久遠—研究論文集』第8輯，早稲田大学仏教青年会。

[2018c]「*Paramahaṃsapriyā* におけるクリシュナ神— *on Bhāgavatapurāṇa* 1.1.1「バクティ派の立場」節解読研究」『南アジア古典学』13, 九州大学大学院人文科学府・文学部インド哲学史研究室。

Nelson, Lance E.

[1986] *Bhakti in Advaita Vedanta: A translation and study of Madhusudana Sarasvati's Bhaktirasayana.* Hamilton: McMaster University (Doctoral Thesis: Unpublished). Downloaded from: https://macsphere.mcmaster.ca/handle/11375/14225 on 15/06/2015.

[2004] "The Ontology of Bhakti: Devotion as Paramapurusārtha in Gaudīya Vaisnavism and Madhusūdana Sarasvatī", *Joural of Indian Philosophy* 32, Netherlands: Kluwer Academic Publishers.

Raghavan, V.

[1978] "Bopadeva", in *Ramayana, Mahabharata and Bhagavata Writers.* ed. Maneesh Shingal and Nitima Shiv Charan. New Delhi: Publications Division (4th Repr.: 2013).

Sawai, Yoshitsugu（澤井義次）

[2016]『シャンカラ派の思想と信仰』慶應義塾大学出版会。

Shima, Iwao（島岩）

[1980]「シャンカラにおける解脱への道とその理論的根拠」『日本仏教学会年報』45, 日本仏教学会。

[1986]「不二一元論学派における解脱への道—『バーマティー』における祭式と瞑想と知識」『宗教研究』60-2, 日本宗教学会。

Tagare, G. V.

[1976] *The Bhāgavata* Purāṇa Part I. Tr. (Ancient Indian Tradition and Mythology Series) [Purāṇas in Translation] Delhi: Motilal Banarsidass Publishers (Repr.: 2011).

Venkatkrishnan, Anand

[2015] *Mīmāṃsā, Vedānta, and the Bhakti Movement.* Columbia: Columbia

University 2015 (Doctoral Thesis, Unpublished). Downloaded from: http://academiccommons.columbia.edu-/catalog/ac%3A189616 on May 9th 2016.

The Logic of Overcoming the Four *Varṇa* and Four *Āśrama* System in Madhusūdana's Commentary on the *Bhāgavatapurāṇa*

Tomohiro MANABE

The *Śrīmadbhāgavatādyaślokatrayasya ṭīkā* (hereafter MSṬ) of Madhusūdana Sarasvatī, a scholar of the Advaita Vedānta school who flourished in the 16th C.E., is a commentary written from the standpoint of the Advaita school on *Bhāgavatapurāṇa* (BhP) 1.1.1-3. In MSṬ on BhP 1.1.2, Madhusūdana argues that the codes of the *bhāgavata* (*bhāgavatadharma*), which are stated in the BhP, do not depend on the four *varṇas* and the four *āśramas*. Considering that Madhusūdana is a scholar of the conservative Advaita school who develops his doctrines based on the *Veda*, this argument would seem innovative in terms of overcoming the traditional four *varṇa* and four *āśrama* system. In this paper, I consider the relevant passages in MSṬ on BhP 1.1.2 with reference to Madhusūdana's *Bhaktirasāyana* (hereafter BhR) and explore the logic he employs to overcome the four *varṇa* and four *āśrama* system, that is to say, the relationship Madhusūdana considered to exist between the codes of the *bhāgavata* in the BhP and the codes proclaimed in the more traditional system (*varṇāśramadharma*).

Madhusūdana identifies devotion (*bhakti*) as a means and the code of *Bhāgavata* with each other, and from the point of view of the code (*dharma*) he places the code of *Bhāgavata*, the means of which is devotion, higher than the codes corresponding to the four *varṇa* and the four *āśrama*, as the former does not depend on the latter. Moreover, the reason why the code of *Bhāgavata* does not depend on the codes corresponding to the four *varṇa* and the four *āśrama* is that the code of *Bhāgavata*, of which devotion is the means, covers all living beings and thus is not limited to those covered by the four *varṇa* and the four *āśrama*. Madhusūdana's opinion is based on the BhP, which is cited as a basis for the discussion in both the MSṬ and the BhR. However, "living beings" are defined as those who possesses a pure internal organ, and in so far as one can become such a being, it is assumed that the codes corresponding to the four *varṇa* and the four *āśrama* need to be followed.

As mentioned above, Madhusādana's view on the code of *Bhāgavata* is innovative in the conservative Advaita school in terms of his acceptance that the code of *Bhāgavata* overcomes the four *varṇa* and four *āśrama* system. However, I would conclude that his basic conservatism still stands as he still assumes the validity of the four *varṇa* and four *āśrama* system until a living beings becomes qualified to follow the code of *Bhāgavata*.